

# 市橋文庫蔵『弥生日記』訳注（四）

## 愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、この『弥生日記』を選び、その読解に取り組んでいる。月に一度の輪講により一昨年度から読み進め、今年度の紀要原稿は、輪講の成果の中から、弟子たちの発句の記述をとりあげている。

輪講での各句の検討は、稀書の会のメンバーが担当し、輪講の参加者による複数回の討議を経た後にあらためて年報用に成稿している。輪読の際の発表者の名を担当箇所の末尾に記した。

### 【凡例】

- 一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（OCH・142）本である。
- 一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割・本文改訂をなした形でとりあげた。

- 一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点、送り

仮名を補った。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付し、前句を添えた。

一、訳注においては、【語釈】、【二句立】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

### 【翻刻】

日高しや腹ぬくとけになくかはつ

守中

吹込の芥に芹の青みかな

李風

道草に嘶のきれぬ霞かな

茂陵

麗中よしありて桑原といふ所

まて来たりしとて花園山を越て

朝とく訪ふ

「六丁ウ

朝冷や深山つゝしのむら蒼

麗中

つくの日鶯樹訪ふ其夜は油かすりて

宵寐せんとす

寐をしみや花に隣の窓あかり

鶯樹

宜彦より消息ありまめやかに

誰かれのほ句もかきて

草はなれするや雲雀の口ほとけ

隣へもけしきわけたる柳かな

乗とけて蛙ゆくなり流れ五器

よする波かへり行波霞けり

あたゝかに成て月夜や藪の寺

なれかゝる味噌の加減も余寒かな

張合て啼鳥はなしきしの声

きさらきのこの朔日も雑煮かな

行暮た所泊りよはるの月

見功者もいらすさくらに酒一壺

けふハ桃の節句なりとて所々

より草餅などおくりこしぬ此日

安芸国へ旅立けるとて塞馬

訪ひきたりぬしかくものかたりもなく

た、離杯をとるのミ

田振里といふ所にて

瀬かしらや朝日待得しのほり鮎

桂寿

芽生

楚城

咫尺

呂文

雪渚

楚岳

平従

一挙

宜彦

「七丁オ

「七丁ウ

塞馬



## 【注釈】

日高しや腹ぬくとげになくかはづ

守中

【式目】春（かはづ）（『毛吹草』春部）

【作者】守中（吉田本町 岩田や次郎吉）と『諸国人名録』B本に記載がある）

【語釈】●ぬくとげ：温かそうに。形容詞「ぬくとし」が体言化した言葉。●「かはづ」：蛙の異称。「蛇も歌を腹に味はふ蛙かな」（『崑山集』・蛙・正重・1686）

【現代語訳】日も高く上がったよ。腹が暖かいのか、気持ちよさそうに蛙が鳴くことだ。

【考察】「守中」という人物は、同時代の尾張・三河の俳諧関係者としては三人知られるようである。豊橋の守中の他に、板倉塞馬が刊行した「安政六己羊載月並会抜粹」には、「ヒロセ」と傍書のある「守中」がおり、この「ヒロセ」は豊田市広瀬のことと考えられる。また、慶応元年に同じく塞馬が記した紀行文『探花記行』には、大野（常滑市大野）在住の人物として「濱島守中」の名が見える。本文は、岡崎・刈谷・宝飯郡御油などに住む卓池や秋拳の門人の発句を、岡崎の鈴木流芝が持参したうちの一つであった。豊田市広瀬は、足助に近い矢作川沿いの土地であり、塞馬の門弟と考えると理解しやすい。流芝は、豊橋の佐野蓬宇と親交もあり、ここはやはり吉田の守中と考えるべきか。

（山本智穂）

## 【注釈】

吹込（ふきこみ）の芥に芹の青みかな

李風

【式目】春（芹）（『俳諧其傘』正月に「芹」、『毛吹草』「連歌四季之詞」「芹 薺・すゝな・すゝしろ・佛の座」初春）

【作者】李風（『御油 池田屋次郎兵衛』と『諸国人名録』B本に記載がある。）「御油」は旧宝飯郡、現在の豊川市の西にある。

【語釈】●吹込：風が吹いて池などにものが飛び入ること。「吹き込む」と動詞で用いられるのではなく、名詞で使われるのは珍しい。「こがらしや池に吹込香の灰」（蕉門俳諧集「後の旅」・探芝・152）。●芥：塵やごみのこと。本来は水にたまったごみを指した。「ちりぬればのちはあくたになる花を思ひしらすもまどふてふかな」（古今集・物名・くたに・僧正遍昭・435）。「待春や氷にまじるちりあくた」（蕉門俳諧集・「炭俵」・智月・458・すすはき）。●芹：セリ科の多年草で湿地や溝に生える。春の七草の一つ。「朝日さす山沢水のうすらひの下に青むは根芹なりけり」（亮々遺稿・沢若菜・1431）。「いがきして誰ともしらぬ人の像／泥にこころのきよき芹の根」（荷兮／重五・31／32・冬の日「炭売りの（歌仙）貞享三年」）。「青柳や芹生の里の芹の中」（蕪村集・発句・柳・1929）

【現代語訳】風に吹かれて水面にたまった塵の中、芹が青々と育ってきていることよ。

（山本智穂）

【注釈】

道草に嘶のきれぬ霞かな

茂陵

【式目】春（霞）（『毛吹草』「連歌四季之詞」「霞 同くむ・同筈」初春）

【作者】茂陵（「荊谷 白木や新右工門」と『諸国人名録』B本に記載がある。）加藤茂陵。刈谷の人。中島秋拳の弟子。弘化三年没、五十九歳。

●道草 道に生えた草。また、行く道で手間とること。「道草をくふてや遅きひまの駒」（『崑山集』・春・吉也・1877）。

●嘶 会話、おしゃべり。「春雨に嘶をくふや堅田鮎」（『己が光』・春・楚江・157）。

【現代語訳】道草をくって歩きながら話す、その話もとぎれないのだが、同じようにとぎれることなくたちこめている春の霞であることよ。

（山本智穂）

## 【注釈】

麗中よしありて桑原といふ所まで来たりしとて花園山を越て朝とく訪ふ

【語釈】●桑原：岡崎市桑原町のことか。●花園山：『秋拳句文帖』文化十年、二村山に登って月見をした際の記述に、「四望くまなくひらけて南に海を見わたす。呼統・星崎の浦は夕波行かよひて、鶇の声は秋かぜの隙にあはれをたたふ。山は伊吹を主として布引・鈴鹿をつなぎ、猿投は聳えて花園山にむかふ。」とある。この『秋拳句文帖』の記述に関し、『西三河の俳人 中島秋拳』において、谷沢靖氏・永田友市氏は、「花園」は豊田市の地名、知立市八橋の北。土地の起伏はあるが、山というほどの所ではない。」と注している。その他には場所を特定している論は見られない。本訳注では、伊藤伸江「花園山考」（『説林』65号）により岡崎の花園山（村積山）と考える。

【現代語訳】麗中が、理由があつて、桑原という所までやつて来たので、花園山を越えて朝早く訪れてきた。

（山本智穂）

## 【注釈】

朝冷や深山つゝ、じのむら<sup>つぼみ</sup>荝

麗中

【式目】春（つゝ、じ）（『毛吹草』「連歌四季之詞」末春）

【作者】麗中 『文政五年牛地紀行』、『文政七年いほはた集』、『文政八年あさち酒』に句が見られる。『西三河の俳人中島秋拳』においては、谷沢・永田氏「未考」。

【語釈】●朝冷：本来は秋の朝の冷えてきた感覚を表現する言葉。さらに、俳諧に使用されることも少ない。歌語とはいえない語句であろう。「朝冷や蒲団にまとふあやめ刈」（野坡・414）。●深山つゝ、じ：ツツジ科ツツジ属。春から夏にかけて花が咲く。古くから庭園栽培され、品種も多いがヤマツツジを始め日本では約五十種ほどが自生している。「山城や紫つつじかぎりなき」（『しら雄句集』春之部・つつじ・286）。「荝には皴をみせたるつつじ哉」（『春泥句集』春之部・

躑躅・召波・201。

【現代語訳】朝の山は冷えこんで、深山つつじのたくさんのつぼみが見えていることよ。

(山本智穂)

【注釈】

次の日、鶯樹訪ふ。その夜は油かすりて

宵寝せんとす。

寝をしみや花に隣の窓あかり

鶯樹

【式目】春(花)

【作者】鶯樹 文政七年の塞馬の広島旅行記『いほはた集』、文政八年に足助の山田真文の三回忌追善集としてされた『あさぢ酒』に句が見える(『板倉塞馬全集』)。

【語釈】●つぐの日 翌日。あくる日。●かする 中に入れたものが少なくなり、取り出す時に底に触れること。「灰

汁桶の雫やみけりきりぎりす／油かすりて宵寝する秋」(猿蓑卷之五・発句／脇・凡兆／芭蕉)。猿蓑の歌仙の芭蕉の句は、秋の句であるが、この句を意識して文を記したか。●宵寝 夜がまだ更けないうちから寝てしまうこと。早寝。「月

花は宵寝朝寝のほだしかな」(毛吹草(追加)・政辰)。●寝をしみ もつたない気持ちが出て寝ることができないこと。

「寝をしみの二人出あひぬ花に月」(梅室家集・278)。●窓あかり 外から窓に差し込む光のこと。「しぐる、や黒木つむ屋の窓あかり」(猿蓑卷之一・冬・凡兆・9)。「うの花や月のちからを窓明り」(芭蕉門名家句集・野坡・765)。「落葉火

や—もえつつの窓明り」(梅室家集・938)

【現代語訳】

翌日、鶯樹が訪れる。その夜は、油が少なくなつて底をつき、宵のうちから寝ようということになる。

もったいなくて寝られないことよ。桜の花が咲いているのに加え、隣の家の明かりで窓の外がほんのりと明るく見えるこの宵は。

(伊藤伸江)

【注釈】

宜彦より消息あり。まめやかに誰かれのほ句もかきて

草ばなれするや雲雀の口ほどけ 桂寿

【式目】春（雲雀）

【作者】桂寿 加藤桂寿。刈谷市の人。天保十一年1841没。『あさぢ酒』（文政八年）、『蘆陰集』（文政十年1827）に句が

見られる（『板倉塞馬全集』）。

【語釈】

●宜彦ぎげん 兼子宜彦ぎげん。明治六年（1863）没。豊明市沓掛村に生まれ、文政頃には不二村山のふもとに住み（秋挙句

文帖文政元年1819奥書）、後に知立八橋無量寿寺に入った（法名義玄）。秋挙没後、その句集『曙庵句集』を秋挙の門人鶴見東雅と共に編纂した。絵も巧みであり、また二村山に桜を植樹したという。●ほ句 発句。●草ばなれ 草から飛び立つ。「草の床起はなれてや朝雲雀」（渭江話・里雀・2736）。●口ほどけ さえずりだすこと。「口解ほどき」は、話し始めの緒をいう。「口ほどけにこにこ草の花袋」（仏兄七久留万・さつまや治衛門英蛛が書たる布袋ほとけの絵に、讀所望・218）。

【現代語訳】

宜彦から手紙がある。こまやかにあの人やこの人の発句も書いていて

草から飛び立ったのであろうか、雲雀が堰を切ったようにさえずりだしたことよ。

(伊藤伸江)



## 【注釈】

隣へもけしきわけたる柳かな

芽生

## 【式目】春（柳）

## 【作者】

芽生<sup>がせい</sup> 文政八年に足助の山田真文の三回忌追善集としてだされた『あさち酒』に句が見える（『板倉塞馬全集』）。

## 【語釈】

●隣へも 隣の家にも。「隣へも知らせず嫁をつれて来て／屏風の陰にみゆるくはし益」（炭俵・野坡／芭蕉・2212／2213）。「となりへもたからとなるや家桜」（毛吹草・春・弘永・937）。●けしきわけたる その様子がつづいている様。

「十六夜の気色わけたり比良伊吹」（韻塞・汶村・436）。

## 【現代語訳】

お隣にもその芽吹いた様子が流れるようにつづいている、春の柳のさまよ。

（伊藤伸江）

## 【注釈】

乗とげて蛙ゆくなり流れ五器

楚城

## 【式目】春（蛙）

## 【作者】

楚城 文政七年の塞馬の広島旅行記『いほはた集』に句が見える（『板倉塞馬全集』）。

## 【語釈】

●乗とげて 乗りおおせて。「花ちるや流るる沓にのる蛙」（俳諧葱摺・廬桂・69）。●五器 食べ物をもるた

めの器、椀。川で洗う。「朽木ノ塗物盆鉢 五器等」（毛吹草卷四 名物・近江）。「五器皿を洗ふ我世や春の水」（其雪影・伏見南山眺望・几董・222）。

## 【現代語訳】

流れていく椀に乗りおおせて、蛙が流れて行くことだ。

（伊藤伸江）

## 【注釈】

よする波かへり行く波霞けり

咫尺

## 【式目】春（霞）

【作者】咫尺 豊明・鳴海千代倉の人。『あさぢ酒』に句あり（『板倉塞馬全集』）。千代倉は屋号。酒造業を営んだ豪商で、鳴海本陣を務めた大地主。二代目当主下里（後に下郷）勘兵衛吉親は、鳴海六俳人の一人で芭蕉の門人。俳号寂照庵知足。芭蕉は『野ざらし紀行』、『笈の小文』など旅の途次に千代倉を訪れた。貞享四（1687）年、鳴海六俳人と歌仙十句を詠んだ記念に、生前唯一の句碑が建立されている。知足をはじめ千代倉家は多くの俳人を出し、山口素堂などの俳人が逗留する場所でもあった。

【語釈】●霞む かすみがかかる。姿がかすかにしか見えない状態になる。「かすみけり雲ゐにまがふ春の海」（大発句帳・兼載・636）。「霞日や只波の音松の音」（俳諧有の儘・諸国の部・李完356）。「いづくより立はじむらんわたのはら霞をわけてよする浦波」（玉葉・兼美・120）

【現代語訳】かすかにしか見えないが、波は繰り返えし、寄せてはかえって行くよ。

【考察】おぼろげな波の動きを、繰り返される波の音と共に追いかけて、春の水辺の風景を全身で味わっているか。

（名倉ミサ子）

## 【注釈】

あたたかに成りて月夜や藪の寺

呂文

## 【式目】春（あたたか）

【作者】呂文（りよぶん・ろもん） 山本嘉兵衛。高岡中根（豊田市）の人（『板倉塞馬全集』）。『いははた集』、『あさぢ酒』に句あり。『牛地記行』の「文音」にも本句と同じ句が見える。

【語釈】●あたたかに「あたたかに成るや手をのすかぎわらび」（犬子集・吉隆・552）。「暖に成りてふりけり夜のゆき」（新雑談集・路人・55）。「あたたかにそふてやなぎの力こぶ」（乙州・310）。●藪 雑草・雑木などの密生しているところ。竹の林。たけやぶ。「藪ごしの月夜にあへり初ざくら」（梅室家集・1106）。「藪寺や笥月夜ほととぎす」（茂美家集・206）。

【現代語訳】あたたかくなつたなあ。いい月夜だ。藪の中の寺にも春の気配が感じられることだ。

【考察】藪は、その音から弥生（やふ）の意もある（広辞苑）。春の季語「あたたか」から、植物の生長と季節とを重ねているか。

（名倉ミサ子）

### 【注釈】

なれかかる味噌の加減も余寒かな

雪渚

【式目】春（余寒）

【作者】雪渚 尾張の人。『あさち酒』（足助・山田真文の三回忌追善集。足助俳壇刊行）。『はなのわたり』（秋拳の一周年忌追善集。文政十一年刊。名古屋・本屋久兵衛刊行）に句が見える（『西三河の俳人 中島秋拳』）。

【語釈】●熟れる 熟成する。程よく時間がたつて味加減がよくなる。「なれ加減又とは出来じひしほ味噌」（いろい・歌仙・荷兮・29）。「味噌の加減を内儀あづかる」（続有磯海・嵐青・632）。「春ちかき三年味噌の名残哉」（韻塞・李由・150）。

●余寒 立春後の寒気。夜が明けてもまだ残る寒さ。残寒。ここは「余寒」に「よ（し）」を掛けているか。「うれしさの丁度ほどよき余寒哉」（鳳朗発句集・春の部・44）。「鶯の舌もまはらぬ余寒かな」（渭江話・諸国発句武蔵之部・杉調・1702）。「関守の火鉢小さき余寒かな」（蕪村発句・1578）。

【現代語訳】仕込んでおいた味噌が熟れかかってきたが、余寒が気にかかる。味噌の出来はどんな塩梅だろうか（よくなってきただろうか）。

## 【注釈】

張り合ひて啼く鳥はなしきじの声

楚岳

## 【式目】春(きじの声)

【作者】楚岳 加藤新次郎(『板倉塞馬全集』)。加藤十左衛門(『三河の俳人 中島秋拳』)。刈谷西境の人。『いははた集』、『蘆陰集三』、『あさぢ酒』、『はなのわたり』などに句が見える。

【語釈】●張り合ふ 互いに負けまいとして、競い合う。競り合う。●啼く鳥 「鳴く鳥のとまり木迄もむくげ哉」(犬子集・休音・1004)。●雉子 「同狩場の雉 声をむすびてハ春なり」(毛吹草卷二 連歌四季之詞・中春)。「春雨のなごりけぶれる松原のおくにきこゆるきじの声かな」(亮々遺稿・春之部・114)。「妻こふや毛をさかさまに雉子の声」(寂芝・2)。「山の幅啼きひろげたり雉の声」(惟然・111)。「広き野を只一呑みや雉の声」(野明・4)。

【現代語訳】きじの声が聞こえる。競い合つて鳴いている鳥はいない様子からすると、あれは縄張り争いに勝ったきじだろうな。

【考察】きじの鳴き声は甲高くてよく通るところから、「きじと張り合つて鳴くような鳥はいないだろう。よく通るきじの声だけが聞こえる」とすることもできるが、ここは季語から、縄張り争いと解釈したい。きじは早春に発情し、雄はケンケンと高く鳴いて雌を争い、一羽の雄が数百羽四方の縄張りを持つが、体が大きくて色彩が鮮やかでよく鳴く雄ほど優位にたち、一夫多妻の群れを作るといふ。

(名倉ミサ子)

きさらぎのこの朔日も雑煮かな

平従

## 【式目】春(きさらぎ)。

【作者】平従 伝未詳。『あさち酒』（足助俳壇刊（秋拳編か）。足助・山田真文の三回忌追善集。文政八年（1825）刊。大磯文庫蔵。『板倉塞馬全集』所収。）83「茶の花のこれも都へをられけり」の句が見える。

【語釈】●雑煮 餅を主に仕立てた汁もの。新年の祝賀などに食する。

【現代語訳】如月のこの朔日も、雑煮であることよ。

【考察】旧暦二月一日には、「重ね正月」、「二月正月」、「一日正月」などという異称がある。この日や節分の日に、厄年の男女が再び正月祝いをして年を一つ余分にとったこととし、厄のがれようとする祝いが、中国地方を中心に行われた。俳諧関係資料では、小林一茶が『西国紀行』（讃岐専念寺から大坂を経て高師浜までの紀行文。寛政七年刊。書名は原本に題簽が無いため、古典俳文学大系がつけたもの。）で、「二月朔日を小正月と云て、雑煮の仕納となん、此地（※松山―狩野注）のならひ也」と記しているものがある。但し、雑煮を食すこと自体は、俳諧関係資料では「正月も廿日に成て雑煮哉」（蕉門名家句集・嵐雪・230）などにも見えるように、正月に限定されたものでは本来ないため、本句が直ちに「重ね正月」の祝いを表しているものと解釈することはできない。西三河における風習なども調査が必要かと思われる。

（狩野一三）

【注釈】

行き暮れた所泊りよはるの月

一挙

【式目】春（はるの月）。

【作者】一挙 伝未詳。『あさち酒』84「啼声もあとさきのなき哥女哉」の句が見える。また、『蘆陰集』三（板倉塞馬自筆の句記録。文政九〜天保六（1826〜1835）年。『板倉塞馬全集』所収。）「同年（※文政十年―狩野注）如月五日於刈谷十念寺 追善秋拳翁 脇起之百韻」への参加が確認できる。

【語釈】●行き暮れた 歩き続けていくうちに、日が暮れる。行く途中で、日が暮れる。「行暮て飛脚は野辺の仮枕」(談林十百韻・867・志斗)。「行暮の行留り也菊の花」(一茶集発句編・1799)。

【現代語訳】歩き続けていくうちに日も暮れてしまったこの場所で泊まればいいのだ、ちょうど春の月も浮かんでいることでもあるし。

(狩野一三)

【注釈】

見功者(みこうしゃ)もいらさくくらに酒一壺

宜彦

【式目】春(さくら)。

【作者】宜彦 既出。

【語釈】●見功者 見方のじょうずな人。物を見なれている者。「是れからが真の見功者の喜ぶ処でござります」(春色玉櫛―初・二回)。

【現代語訳】桜の花を、上手に見る人などにも必要ない。ただ花と、酒が一壺、あればいいのだ。

(狩野一三)

【注釈】

けふは桃の節句なりとて所々

より草餅などおくりこしぬ。此日

安芸国へ旅立けるとて塞馬

訪ひきたりぬ。しかじかのものがたりもなく

ただ離杯をとるのみ。

田振里といふ所にて

瀬がしらや朝日待ち得しのほり鮎

塞馬

【式目】春（のほり鮎）。

【作者】塞馬 板倉塞馬（一庵）。天明八（1788）〜慶応三（1867）年。「加茂郡足助本町（現豊田市）の味噌醬油業池田屋

六代。代々七右衛門を名乗る。俳諧は中島（曙庵）秋拳に師事、秋拳没後卓池に心酔し、卓池死去までのおよそ二十年間師事した。弘化元年、五十七歳で隠居、半足庵に入庵。卓池没後は後継者争いに巻き込まれたが、七回忌追善を執り行い、後進指導にあたった。」（愛知県史資料編20 近世6学芸）による。）また『諸国人名録』B本に「塞馬 足助本町 池田や板倉七右工門」とある。

【語釈】●草餅 母子草、艾、高菜などの葉を入れてついた餅。三月三日の雛祭に供える習慣がある。草の餅。くさもちい。●離杯 別離の時に酒をくみかわす杯。また、その酒。「渭堤の輻湊亭に、東行の離盃をとりて／残菊にさめじと契る鬱金香」（井華集・608）。「九月六日浪花の人々に見おくられて、玉造の茶店に離杯を傾く／とかくして苧に日の入るわかれ哉」（青々処句集下・秋・307）。●田振里 現在の愛知県豊田市田振町。●瀬がしら 瀬のはじまるところ。ゆるやかな流れから波がたちはじめて瀬になりかかるところ。「瀬がしらのぼるかげろふの水」（続猿蓑・36・里圃）。●待ち得 待つてそのものに会う。待ち迎える。迎えとる。「優曇華の花まちえたる心地してみ山桜に目こそうつらね」（源氏・若紫）。●のほり鮎 成長して春に川をさかのぼって行く若鮎。「瀬をはやみ岩にせかれなのほり鮎」（ゆめみ草・1255・成政）。

【他集への入集】「きら、句集」（「塞馬自筆の自選句集草稿。筆年不詳。『板倉塞馬全集』所収。「けだし、文久二年に句碑を孫の哲史に建てさせ、引き続き句集を編集しはじめたと思われるから、編集年は文久二〜三年頃か。宇野文庫蔵。」とある。）に、「瀬がしらや朝日まち得し登り鮎」と見える。

【現代語訳】今日は桃の節句であるということで、方々から草餅などが送られてきた。この日、安芸国へ旅立つということである。あれこれと話すようなこともなく、ただ別離の杯を交わすのみである。

田振里という所にて

朝日が昇るのを迎え、いよいよ川を上っていこうとする鮎のひそむ、波のきらめく瀬頭よ。

【考察】塞馬が安芸国へ旅立つ事情については、『いははた集』（塞馬の広島旅行記。文政八年（1825）刊。『板倉塞馬全集』所収。）によって知ることができる。それによると、「我父市中にありしより志を禅味にはこび、終に蝸牛の家を放れて遠く安芸の国に庵をむすび一円窓中に真如の月を弄せられしが、今年齡七旬に近くなり給ひぬれば、老木の花の咲おくる、も物うく、頻に身のおとろへもてゆくを顧らる、よし聞へにければ、かの西上人の「雨の山辺やちかくなる覧」といへる言の葉もこゝろにかゝりて、今一度謁ん事を思ひ立ぬ。」とあり、塞馬は安芸国に庵をむすぶ父（智純）が七十歳に近くなっていることを思い、今一度会おうという思いを抱き、父のもとへ向かったということである。この句は、そのような自らの状況を、これから川を遡上していこうとする鮎に重ね合わせたかと思えることも出来よう。

（狩野二三）

### 【引用文献】

和歌・俳諧の引用は新編国歌大観、新編私家集大成、古典俳文学大系のCD-ROMによる。語釈では、『角川古語大辞典』、『日本国語大辞典』、『和歌大辞典』、『季語辞典』等を参考にしている。

『毛吹草』（1943・岩波書店）

『俳諧類船集』…『近世文藝叢刊1 俳諧類船集』（野間光辰 監 1969）・『近世文藝叢刊別巻1 俳諧類船集索引付合語篇』

（野間光辰 監 1973）・『近世文藝叢刊別巻2 俳諧類船集索引事項篇』（野間光辰 監 1976）



『諸国人名録』 B本：大磯義雄『青々卓池と三河俳壇』（1989・名著出版）

「安政六己羊載月並会抜粹」：深津三郎編『板倉塞馬全集』（2003・犬塚謄写堂）

『探花記行』、『文政五年牛地紀行』、『文政七年いほはた集』、『文政八年あさぢ酒』：深津三郎編『板倉塞馬全集』（2003・犬塚謄写堂）

『猿蓑』：新日本古典文学大系『芭蕉七部集』（1990・岩波書店）

『俳諧無言抄』（宮坂敏夫・東明雅「俳諧無言抄 翻刻と解説その一」（『信州大学医療技術短大部紀要』八巻一号・1983）

『万有百科大事典20 動物』（1977・小学館）

『図説俳句大歳時記 春』（1970・角川書店）

#### 【参考文献】

大磯義雄『青々卓池と三河俳壇』（1989・愛知大学総合郷土研究所）

谷沢靖・永田友市『西三河の俳人中島秋拳』（1982・西村書房）

服部徳次郎『尾張の芭蕉門人』（1984・竹中書店）

さるみの会編『東海の芭蕉』（1973・泰文堂）

市橋文庫蔵『弥生日記訳注(三)』補訂

敷芝に目ばちやかなる蛙かな

東雅

訳注(三)において、第二句を『新編岡崎市史 近世文芸13』に従い「目ばちやか」と読んだ(原文は「目はちやか」)。しかし、「めばち」ではなく「めばち」ではないかとのご指摘を加藤定彦立教大名誉教授より受けた。三河地方には、もともと「目發」という語句からできたメダカを意味する方言として「めんぱち」「めんぱちご」があるが、岡崎市の方言を集めた『三河ふるさと辞典』(風媒社・2001)には、「メンパチ 目高の一種」と共に「メバチヤカ 美人の表現。目元ぱちちり。」がのっており、この場合には発音が濁音とされていると考えることができる。東雅は刈谷の人であり、岡崎と同じ西三河方言を使用していると考え、表記を変更する。

【現代語訳】敷かれた芝の上に、目が大きな蛙がいることよ。

『弥生日記』実地踏査報告

伊藤伸江

【踏査日時】

平成二十八年九月十九日(月) 午前八時四十分～午後五時

【踏査内容】

県大所蔵古俳書『弥生日記』ゆかりの俳人の資料を拝見し、実際に各地をめぐり、図書館展示、研究会用に資料写真を撮影する。具体的には『弥生日記』作者、鶴田卓池、中島秋挙や、句を寄せている中根椋堂に関連して踏査をなし、碧南から小垣江、安城をめぐった。

【目的地とスケジュール】

①碧南市藤井達吉現代美術館(碧南市音羽町一ノ一)

お世話になる学芸員豆田誠路さんにご挨拶

(十時着～十時十五分発)

② 中根佑治様宅 (中根齒科医院 (碧南市東浦町四ノ六一ノ二))

中根様資料を拝見、お話をうかがう

(十時三十分着～十一時十分頃)

③ 中根榎堂旧宅 (碧南市東浦町五丁目付近) など現地見学

(十一時十五分～十一時三十分)

④ 碧南から小垣江へ、中島秋拳旧宅 (曙庵) 現地見学

(十三時四十分～十四時三十分)

⑤ 安城市歴史博物館 (安城市安城町城堀三〇)

お世話になる学芸員三島一信さんにご挨拶

田卓池、中島秋拳、井上士朗資料を拝見

稀書の会の図書館展示にお借りする資料についてご相談

(十五時着～十六時三十分発)

安城市を横切る東海道の松並木を車窓より見て、解散

### 【参加者】

教員 伊藤伸江

院卒生・院生・学生

山本智穂、狩野一三、松田志麻、加藤希、花村彩華、香村彩、坂侑香理



本学図書館貴重書調査と書誌の窓から

〔不角追善集〕について―書名決定し得なかった例―

狩野一三

愛知県立大学学術情報研究センター長久手キャンパス図書館に収蔵されている膨大な俳書群の一つに、「不角」という俳人の追善集がある。本書は丁付が第二十七丁から始まっている欠本であり、不局（不角長男）・寿角による序と、宝暦四（1754）年の蟠桃軒三千世による跋を持つ。内題を持たず、また題簽も判読不能である。そのため本書は暫定的に「不角追善集」と名付けられ、『愛知県立大学附属図書館特別書庫目録』一（1974年3月、愛知県立大学・愛知県立女子短期大学）36頁に記載されている。また国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースを参照すると、「蟬の声」という書名で写本が天理大学綿屋文庫に、また版本が「不角追善集下」として愛知女大（現愛知県立大学）に所蔵されていることになっている。

本学所蔵の古俳書群は、平成22年・23年度において理事長特別研究費の交付を受け、デジタル化に向けての再調査が行われた。本書もその対象であるため、書名認定についての調査を今一度行った。

そもそも、『愛知県立大学附属図書館特別書庫目録』一には、本書について、『俳諧書籍目録』にいう『うつ蟬』かと記述されている。『俳諧書籍目録』（『新群書類従』七所収）には「うつ蟬 柳軒 宝暦四年」とあり、『国書総目録』もこれを踏襲している。ところで本書は、平島順子氏によって『蟬の聲（仮題）』翻刻と解題―不角の追善集―（『文献探求』1996年3月、文献探求の会、九州大学文学部国語学国文学研究室）において翻刻と解題が発表されている。ここで平島氏は、『俳諧書籍目録』以降の研究に『うつ蟬』の著者として見える「柳軒」という号が、不角の長男不局の号である「友柳軒」であるかとも思われること、また「宝暦四年」という成立年が、『うつ蟬』と本書跋とで一致すること、不角の辞世の句「空蟬はもとの裸に戻りけり」とよく合うことに着目された。そこで、本書は先行研究のとおり

り『うつ蟬』の可能性が高い、としながらも、これらが両書を同一の書であるとする決定的な証拠とは言えないため、本書を書写したものと思しい綿屋文庫本が『仮題 蟬の声』という題簽を持つていることに従って、本書の書名をもまた仮に「蟬の声」と認定された。しかしながら、綿屋文庫本に「仮題」とあること、また題簽題であつて内題ではないことから、綿屋文庫本の書写者が書名についてどのような認識を持つていたのかは不明確であり、『仮題 蟬の声』という書名が後人によるものである可能性も否定は出来ないであろうと考えられる。そこで、今回の再調査では、再び「不角追善集」という暫定的な書名で認定することとした。

(狩野一三)